

22.4.21

朝日新聞
34

鹿大の チカラ

KAGOSHIMA
UNIVERSITY

工学部

「お年寄りやその家族が快適に過ごせる高齢者施設の形とは何か」「老舗百貨店の建物は時代の変遷にどう合わせてきたのか」――。

こうしたテーマを追い続けているのが、鈴木健二准教授。建築学Ⅱだ。介護施設や集合住宅、保育園など、研究対象にするのは身近にある建物ばかり。施設がどう利用され、どうしたらより良い空間となるか。現場を訪れ、多くの事例を学びながら、建物の有効活用のあり方を提起している。

「公共性の高い施設は利用者

鈴木 健二 准教授(36)



にとつて快適な空間であることが求められる。たくさん的好例に触れる」とで、課題解決につながるヒントが得られる」

建築の世界に興味を持つたのは、東北大工学部の学生時代。

高齢者ケアに手厚い福祉先進国スウェーデンの住環境の考え方を国内に紹介した、外山義・助教授(後の京大大学院教授、故人)との出会いが転機となった。

ちょうどその頃、福島県に住む祖母が入院。2カ月ほどでげつそりとやせてしまった。当時の病院は長期入院を想定しておらず、病室は相部屋が基本。プライバシー保護も十分ではなかった。

「なぜなのか」。祖母の姿を見て療養環境のあり方に疑問を

持ち始めた頃、相部屋が当たり前だった病院や高齢者施設の個室化を提唱し、活動に取り組んでいた外山助教授に共感した。鈴木准教授が研究対象とする施設は多岐にわたる。

例えば、外山助教授が設計に携わった福岡県宮若市の有吉病院。増改築により相部屋から個室・ユニット型に改修し、入院患者の居住環境を大幅に向上させた。

スなどは高額な費用負担がネックだが、身近にある病院でも工夫次第で安らぎの空間が実現できることを学べた」興味は地方百貨店にも向けられる。

鹿児島を代表する百貨店「山

自宅を思わせる温かみのある形屋」。100年近くになる建物は、度重なる増改築や法改正に伴い、乗り越えてきた。どう対応し、乗り越えてきたのか。その変遷を知りたいと、2年前から調査研究に取り組んでいる。

事業拡大に伴い、増改築を繰り返してきた山形屋の特徴は、水平に加え垂直方向にも増築されてきた点だ。背景には、31歳という高さ制限が定められた市街地建築物法(大正8年制定)があるところ。

2004年3月に学生2人と参加した屋久島での廃校改修プロジェクト。現場に飛び込むことで問題意識が養われるという=鈴木准教授提供

当時、都會の百貨店は制限いっぱいの高さで建てられたが、都會に比べ人口の少なかつた地方都市の山形屋は低層な建物でスタートしたため、上層に増築の余地があったのだという。「建物の変遷から時代の移り変わりがわかるのも、この研究のおもしろいところ。歴史ある建物が時代のニーズに合わせ、どのように発展してきたのか。他県にある百貨店とも比較しながら、その背景に迫りたい」

